

文化・芸術

「日本女俗選」から

「花時（高見澤摺）」

1944、46年、木版・紙
24・3枚×18・2枚

恩地孝四郎（1891～1955年）

石灯籠の近くで満開に咲く桜。その枝を少し分けようとしているのでしょうか。はさみを持った着物姿の女性が桜の枝に手を添えています。手を添えた反動で、桜の花びらがちらちらと舞っている風情のある一場面です。

恩地孝四郎は、「花時はうつうつと重たい明るさでもある」と書き残しています。満開に咲いた桜はきれいだけれども、はかなさも内包している。この女性がどこか憂いを帯びた表情をしているのは、そんな花盛りのかれんさだけではない寂しさを感じているからでしょうか。

本作は、前川千帆、恩地孝四郎、川西英、関野準一郎、斎藤清らが四季折々、日本各地の日常の中の女性のしぐさを表現した版画集の中の一葉です。満開になったかと思えば雪や雨で散り始めていく水道山の桜と、あわせて鑑賞ください。

（池田）

《名画の扉》

大川美術館企画展から

